

東三河高大連携協議会の活動について

－これまでの活動のまとめと今後の展望－

愛知県立豊丘高等学校 校長 梅藤 仁志

1 はじめに

東三河高大連携協議会は平成20年11月、県内の他地区に先駆けて発足した。ここでは設立の経緯について、設立趣意書を引用して紹介する。

東三河高大連携協議会設立趣意書

我が国においては、大学全入時代を迎えるなか、高校卒業生のうち、50パーセントを超える生徒が大学、短期大学へ進学するという状況にある。一方、各種調査によれば、専門分野を学ぶうえで必要な学力を身につけず、また大学で学ぶことへの確固たる目的意識や将来への展望をもたないまま進学する者の増加が指摘されている。大学においても学生の学力、学ぶことへのモチベーションの低下が重大な課題として浮上しているといわれ、そのことも考えあわせると、現在の状況は将来、我が国の社会基盤を揺るがすことにもなりかねない大きな問題をはらんでいる。

その中で、生徒の学習および自分の将来への意識を明確化し、高校から大学への接続を円滑化することを目指した「高大連携」が注目されている。東三河地域においてもすでにさまざまな形で大学と高校との連携事業が実施されており、成果を上げつつある。

しかしながら、各学校間で実施されているため、大学、高校双方の負担が大きいと同時にその成果が外部には見えにくいという問題がある。現在の状況が第1段階とすれば、第2段階として、事業の成果を地域全体に普及すること、学校の枠を越えて活動することによって、生徒がお互いに刺激し合い、より大きい成果を上げることが期待される。

こうした観点から東三河高大連携協議会を設立し、東三河地域における高大連携事業計画とその実施の調整を行い事業の円滑化を図ると同時に事業成果の拡大と普及を目指したい。

平成20年11月14日

2 研究の概要

(1) これまでの経過

発足

本協議会の設立にあたって準備会（平成20年9月2日）を時習館高校を会場として開催した。

出席者は以下のメンバーであった。

大学

豊橋技術科学大学	愛知大学
豊橋創造大学	愛知新城大谷大学
愛知工科大学	

高校

県立時習館高等学校	県立豊橋東高等学校
県立豊丘高等学校	県立成章高等学校
県立国府高等学校	県立蒲郡高等学校
県立豊橋工業高等学校	
県立新城高等学校	

この席で協議された項目は次のとおりである。

- ① 設立趣意書（案）
- ② 規約（案）
- ③ 事業計画
 - ア 東三河高大連携に関する情報の共有化
 - イ 同事業の推進
 - ウ フォーラムの企画・運営
 - エ 部活動等における高大連携に関する調査

以上の点に関しては前向きな意見がほとんどであり、概ね了解された。この準備会終了後、事務局（時習館高校）からの以下の提案が了承された。

- ① 各大学の次年度事業計画案を加盟高校へメール送信する。
- ② 受け取った高校では、それに対する意見・要望を大学に伝える。
- ③ 各大学はそれらを集約し、調整した事業計画を事務局へ送信する。
- ④ 事務局は送られた事業計画を整理し、各高校へ配信する。

- ⑤ 各大学の事業案内および申込については各大学のHPを利用してそれぞれ行う。
- ⑥ 当面は上記の形で事業を実施し、発生する諸問題については本協議会で協議し、次年度への改善案として提案する。

この準備会の後、11月14日、設立総会を開催した。総会にあたっては、上記各大学と県立高校の他、東三河地区の全ての公立高校が出席した。この総会において、会の名称を「東三河高大連携協議会」とすること、設立趣意書および規約の承認等が行われ、本協議会の活動が開始された。

実際には、前述のとおり本協議会発足以前からそれぞれの大学と高校との間での連携事業が行われていた。

豊橋技術科学大学と時習館高校との間での「実験実習講座」およびその成果発表会、愛知大学と豊橋商業高校が実施していた「経済学部との共同研究」、国際コミュニケーション学部の授業への参加等、また豊橋創造大学と宝陵高校の間では「教養講座」が行われていた。その他にも、出前講座の形による連携もいくつかの高校で行われている。設立総会以降、1月と3月にワーキンググループ（大学5校と高校の幹事校8校）が行われた。先ほど記したこれまでの実績を踏まえ、次年度に向けての協議が行われた。

第1回、第2回ワーキンググループ協議内容

第1回（1月9日）では、次年度に向けての準備として、東三河地区の高校における高大連携事業の実態および次年度計画の把握を行うこと、そのためのアンケートを実施すること、さらには現状における問題点についての協議と決定がなされた。

続いて行われた第2回（3月3日）では、上記のアンケート結果報告が行われた。それによれば、高大連携事業と一口にいわれるが、実際にはさまざまな形態があることが浮き彫りになった。そこで、次年度の事業計画を集約する際の参考として、それぞれの大学、高校の事業計画を以下のような形で分類してみた。

- ア 大学から特定の高校に連携をよびかけるもの
- イ 大学がひろく高校生全般によびかけるもの
- ウ 大学が特定の学科（例 商業科、看護科等）を対象として実施するもの
- エ 高校から特定の大学に連携をよびかけるもの

オ ある高校と特定の大学での連携事業に他校の生徒も参加するもの

カ 進路指導の一環として、出前講義形式で行われるもの

上記の事業は高校生のみが参加して行われるものだが、その他、高校生が大学生といっしょに授業を受ける形のものもある。こうした実施形態の実情をふまえ、本事業のさらなる発展に向けて次の事項が検討された。

ア 本協議会会員相互の情報の共有化を目指してホームページを作成すること。

イ 本事業の充実と発展をめざして

- ① 事業参加機会の増加
- ② 単位認定に相当する事業の実施
- ③ 本協議会主催事業の開催
- ④ 事業報告書の作成
- ⑤ 高大連携事業先進地域の視察
- ⑥ 高校教員による大学生支援事業
- ⑦ 中高大連携事業への発展

ウ 本協議会主催「高大連携教育フォーラム」の開催

発足年度のまとめ

これまで発足年度の経過をまとめてきた。振り返ってみると、東三河高大連携協議会の方向性はこの発足年度におおむね固まったと思われる。

大学、高校双方の認識としては、生徒一人ひとりが自分の将来を考えていくうえで、高校の先にあるものは何か、大学ではどのようなことが行われるのか、自分は何を学びたいのかということを経験として実感できる貴重な機会が高大連携事業であること、高校での学習のレベルを超えた内容を学ぶことが「学ぶ」ことの大きなモチベーションになること、さらに高校の枠を越えて互いに切磋琢磨することは高校生の大きな成長につながるなどが挙げられる。

平成21年度から23年度までの経過

発足年度の方針にそってそれぞれの高大連携事業が進められているが、本協議会主催事業として特筆すべきは「東三河高大連携フォーラム」の開催である。このフォーラムでは、その年度の連携事業活動報告、講演、パネルディスカッション等が行われている。参考として、平成22年度の内容を次に示す。

平成22年度

1 活動報告

(1) 豊橋技術科学大学

「豊橋技術科学大学における連携事業の取り組み」

(2) 豊橋創造大学

「高等学校に対する情報教育支援について」

－ 人的支援と施設設備支援 －

(3) 愛知工科大学

「東三河高大連携事業 夏季大学体験講座」

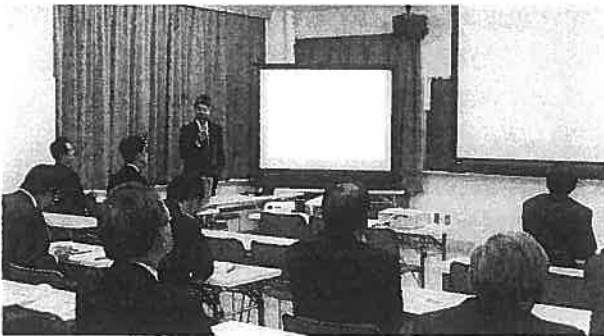
(4) 愛知大学

「愛知大学における東三河高大連携事業の取組み」

2 講演会

演題 「高校生のメンタルヘルスケア」

講師 愛知大学文学部 木之下 隆夫 教授



平成22年度「東三河高大連携フォーラム」風景

上記活動報告では、各大学の教授と連携先高校の教諭による発表が行われた。また愛知工科大学の発表では参加した生徒による活動報告が行われた。しかし残念ながら、これまでのフォーラムは大学と高校の教員が参加対象であり、生徒は上記のとおり、当日発表するもののみが出席するだけであった。今後は、さまざまな連携事業に参加した生徒も出席し、その成果の報告と還元を目指したいと考えている。

(2) 成果

本協議会が発足して5年目を迎えた。これまでの成果を総括してみると次のとおりである。

ア それまで個別（1大学対1高校）で行われていたために分からなかった高大連携事業の様子が可視化され、事業の可能性が広がった。

イ 事業の広報がより広範囲に広がり、参加しやすくなった。

ウ 高校の枠を越えた事業の実施により、互いに刺激を受けることによる意欲の向上が増加した。

エ 実際に大学を訪れたり、大学での授業を体験し

たりすることで自らの将来に対する明らかな目標を見つけることができたという声が多く聞かれた。高校生のキャリア教育に有効な機会であった。オ 高校の学習内容を越えたレベルの学問を学ぶことで高校での学習に対する意欲が増したという意見があり、高大連携から一歩進んで「高大接続」にもつながっていると考えられる。

(3) 課題

目下の大きな課題は、連携事業を運営する際の大学と高校双方の負担感が大きい点である。やはり、大学、高校双方にコーディネータを置き、そこを窓口として円滑な連携事業の運営をすることが、今後この事業を継続していくうえで必要であるという意見が多く、今後に向けて検討していく予定である。

(4) 今後の展望

平成20年秋の設立以来4年が経過した。この間に東三河地域においては東三河県庁の設置、三遠南信地域の連携などが活発に行われるようになった。

そうした社会情勢の変化を受け、本協議会も遠州地域との連携を模索した。従来、東三河地域と遠州、とりわけ浜松地区との交流は産業、経済をはじめとして盛んであり、教育の分野においても東三河地域の高校生が浜松地区の大学に多数進学するという実態がある。そこで、24年5月に静岡大学、静岡文化芸術大学、常葉大学、浜松学院大学、聖隷クリストファー大学に対して東三河高大連携協議会への参加を依頼したところ、参加受諾の回答をいただき、7月に24年度第1回の幹事会を開催した。

これにより、大学との連携事業の幅が拡大し、生徒の参加意欲も増すことが期待されている。

3 まとめ

発足後、5年が経過し本協議会の活動も軌道にのってきた感がある。参加大学のある担当者は「この東三河の高校生を地域全体の財産として高校、大学が一体となって育てていきたい。」と言われた。今後も、人材という地域の貴重な財産の育成に寄与する協議会でありたいと考えている。

東三河・浜松地区高大連携協議会の活動について(その2)

【趣意書】※浜松地区の大学加盟へ

東三河地区においては、愛知県の他地域に先駆け、平成20年11月から、地域の全公立学校と東三河地域に所在するすべての大学・短期大学が参加して東三河高大連携協議会を設立し、高大連携事業を展開して大きな成果を収めてきた。設立にあたっては、当時の社会情勢として以下のような認識がなされた。それは、少子化により大学全入化時代を迎えたこと、大学、短期大学への進学率が50パーセントを超えたこと、その一方で、必要な学力を身につけないまま高校を卒業していく者、大学で学ぶことへの確固たる目的意識や将来への展望をもたないまま進学する者が増加していること、大学においても学生の学力、学ぶことへのモチベーションの低下が重大な課題として浮上してきているということであった。その中で、生徒自身の学習および将来に対する意識を明確化し、高校から大学への接続を円滑化することを目指した「高大連携」の重要性が認識されてきたが、その実施方法において、各学校間で実施されているため、大学、高校双方の負担が大きいこと、その成果が外部には見えにくいことという問題も生じていた。

そこで、当時の状況が第1段階とすれば、第2段階として、事業の成果を地域全体に普及すること、学校の枠を越えて活動することによって、生徒がお互いに刺激し合い、より大きい成果を上げることへの期待から、東三河高大連携協議会が設立され、東三河地域における高大連携事業計画とその実施の調整を行い事業の円滑化を図ると同時に事業成果の拡大と普及を目指すことになった。

その後、東三河高大連携協議会が設立されて以降5年の間に、東三河県庁の設置、三遠南信地域の連携等地域全体の活性化が盛んに行われるようになってきた。歴史的にみても東三河地域と遠州とりわけ浜松地区との行政区を越えた経済的な交流、人事的な交流は盛んに行われてきており、大学進学という点においても本地域から浜松地区の大学への進学希望も相当な数にのぼっている。そこでこうした状況を踏まえ、本協議会を浜松地区にも拡大し、これまでの東三河高大連携事業に加え、浜松地区の大学との連携を円滑に実施することによって、生徒の将来ばかりでなく、広く東三河・浜松地区の活性化にも役立てることができるのではないかと期待する。

平成24年7月19日

【加盟団体】

東三河地域

国立大学法人豊橋技術科学大学
愛知大学
愛知大学短期大学部
豊橋創造大学
豊橋創造大学短期大学部
愛知工科大学
愛知工科大学自動車短期大学

浜松地区

国立大学法人静岡大学
公立大学法人静岡文化芸術大学
浜松学院大学
浜松学院大学短期大学部
常葉大学
聖隷クリストファー大学

高校

愛知県立時習館高等学校
愛知県立豊橋東高等学校
愛知県立豊丘高等学校
愛知県立豊橋南高等学校
愛知県立豊橋西高等学校

愛知県立豊橋工業高等学校
愛知県立豊橋商業高等学校
愛知県立成章高等学校
愛知県立福江高等学校
愛知県立渥美農業高等学校
愛知県立国府高等学校
愛知県立豊川工業高等学校
愛知県立蒲郡高等学校
愛知県立蒲郡東高等学校
愛知県立三谷水産高等学校
静岡理工科大学 愛知県立新城東高等学校
愛知県立新城高等学校
愛知県立田口高等学校
愛知県立宝陵高等学校
愛知県立小坂井高等学校
愛知県立御津高等学校
愛知県立豊橋養護学校
愛知県立豊橋聾学校
愛知県立豊川養護学校
豊橋市立豊橋高等学校